

ように呼ばれるものを性欲に還元することによって相対化してしまう。その限りでは、彼はトルストイと戦略的に同じ地点にいる。しかしながら、二葉亭の場合はトルストイと違って、キリスト教の原則をつきつめて行こうとして、このような相対化が行われたのではなく、キリスト教の教義の否定の上にこれは出てきている。そのため、キリスト教のロジックに基づいて、「不犯」を説くトルストイの考えを、二葉亭は「伊勢屋の隠居の心学」だと断罪するのである。

二葉亭にとって、ロマンティックな傾向を持つ文学者が描き出す「神聖で高尚な」愛が虚偽ならば、トルストイの説く絶対的貞潔の理想も虚偽なのだ。二葉亭とトルストイの議論がかみ合わないのは、二葉亭が精神的な神の王国という理想を受け入れていないからである。こうして、彼は「平凡」と彼が呼ぶ境地に向かっていく。二葉亭は、恋愛は、そして性欲は、高尚でもなければ下劣でもないという信念に至るのである。下劣であると考えたのはトルストイ

であり、高尚であると考えたのは若い頃の自分であり、また、日本のキリスト教系の文学者たちであり、西洋近代のロマン主義文学であった。

ところで、こうして二つの恋愛観・性愛観を斥けた二葉亭が、代わりに提示する恋愛観は何なのか。『平凡』の主人公古屋が恋する雪江さんを口説こうとして依拠する教科書は、『春色梅暦』なのである。

肉欲と愛を区別する二元論的発想、性愛を宗教的な善悪のカテゴリーで考える思考法を明治以前の日本人はほとんど持っていなかった。キリスト教の教義を否定する時、「高尚な愛」という神話も崩れていく。ところが、超越的理想への希求というようなモメントを持たず、直接的な快楽を肯定する恋愛観、それはとりも直さず人情本の論理であり、「粹」の倫理ではないか。神聖でもなければ下劣でもない「平凡な」恋愛というものを思い描き、キリスト教と結び付いた西洋の恋愛観を否定した時、二葉亭は江戸時代の人間にとっての愛に戻って行くしかなかったのである。

パステルナークの詩集『第二の誕生』について

前 木 祥 子

〈問題提起〉 パステルナークは1923年に第四詩集『主題と変奏』を出したあと、叙事詩に向かった。「叙事詩は時代の要求であると考え、それゆえ、困難ではあるが叙事詩的思考に移行する」とまで述べ、意欲的に作品を発表していたが、20年代末から抒情詩へ回帰する傾向がみられ、32年には十年ぶりで第五詩集『第二の誕生』を

著した。意識的に叙事詩を選択したパステルナークが、抒情詩に戻っていったのはなぜか。この問題について、第一に詩集の流れから、第二に詩集の題名が持つ意味を考察し、答えを探っていく。

01. 詩集『第二の誕生』の流れをなしているのは、ある女性との出会い、妻との別れ、ある女性との恋愛とその成就である。

02. 愛の始まりは、詩『バラード』に描かれている。ここではまだ主人公の心情は吐露されていないが、パステルナークの詩において愛と深く拘る自然現象である雨が全体を支配し、女性の存在が語られ、愛の始まりの暗示にみちた詩となっている。

03. 詩集の流れにそって次にみるべき詩は、『取り乱してはいけない』である。主人公はここで一人の女性に別れを告げている。「ぼくらの結びつき、ぼくらの名誉は一つ屋根の下にあるのではない」という詩行からわかるように、相手の女性は主人公の妻である。

04. 詩『取り乱してはいけない』を境に新しい形象が次第にはっきり現われてくる。詩『他人を愛するのは』で、「きみはこのうえなく美しく／きみの考えは大気のように私欲がない」と語られ、愛の調子は、詩『ぼくの美しい人よ』で最高に達する。

05. パステルナークが詩のなかで語る愛は、詩作と密接に関係するという特徴を持っている。詩集『第二の誕生』に収められた愛を主題にした詩には、「愛は韻のなかに生き、韻のなかでようやく耐えている」などの詩行が随所にみられ、愛と詩との密接な繋がりが顕著である。

06. 詩集の流れを追ってゆくと、主人公の愛は成就し、新しく愛の対象になった女性は主人公の「人生そのもの」になってゆく。

07. 詩集の流れは、パステルナークの伝記とほぼ正確に重なる。この時期、詩人は詩『バラード』を捧げたジナイーダ・ネイガウスと恋に陥り、妻エヴゲニヤと別れ、ジナイーダと結ばれる。

08. パステルナークが抒情詩に向けた動機の一つにジナイーダとの恋愛による創作意欲の高揚が考えられる。

09. 次に詩集の題名「第二の誕生」につ

いて考える。詩集の流れをみれば、新しい愛をもって再び誕生する、という意味をこめての題名がつけられたと推察できる。しかし、それまでのパステルナークの詩集の題名が詩や章の名にみられることを思うと、表題詩はおろか、「第二の誕生」という言葉さえ詩集のどこにも存在しない事実は注目すべきである。したがって、その意味するところを、たんに新しい女性との出発だけにことよせるのには疑問が残る。

10. そこで、詩集以外に範囲を広げて、「第二の誕生」という言葉を探してゆくと、詩集とほぼ同時代に書かれたエッセイ『安全通行証』のなかで「これは第二の誕生なのではないか」という文章に突き当たる。エッセイ執筆中にマヤコフスキーが自殺したという事情もあって、多くの頁がマヤコフスキーについてさかれているが、「第二の誕生」もそのなかにある。パステルナークは死せるマヤコフスキーの顔を「それは人が人生を終えるのではなく、始めるときの表情だった」と書いている。つまり、これが「第二の誕生」だと言うのである。

11. 詩集『第二の誕生』が書かれた時期、パステルナークのなかではマヤコフスキーの死と「第二の誕生」という言葉は結びついてきた。そして、詩集『第二の誕生』のなかには、マヤコフスキーの死について書いた詩『詩人の死』があり、この詩の世界は『安全通行証』に書かれた場面にびたりと一致している。

12. 詩『詩人の死』が、詩集『第二の誕生』に収められたことで、「第二の誕生」は二つの意味を持つことになった。すなわち、愛の誕生と、マヤコフスキーの蘇りである。

〈結論〉 新しい愛の誕生とマヤコフスキーの死がパステルナークを大きく動かし、抒情詩へと向わせたとみることができる。

つまり、新しい愛をつむぎ、マヤコフスキーを記憶のなかに蘇らせるために、パステルナークは叙事詩ではなく抒情詩を選んだのである。

詩集『第二の誕生』を境に、そのあと叙事詩が一篇も書かれていないことをみても、

この抒情詩への回帰は意味が深い。フレイシュマンのように、『『第二の誕生』は第三詩集に比べ、みるところが少ない』と通り過ぎるべきではなく、シニャフスキーのように、後期に繋がる重要な詩集とみて、さらなる考察が必要とされるだろう。

新しい政治的思考について

稲 葉 守

第一次世界大戦の勃発と帝国主義戦争への第二インターナショナルの加担はロシア革命を必然たらしめた客観的な諸前提であった。この事態の到来を戦前から予測し非戦・反戦を訴え続けていたロシア社会民主労働党左派（ポリシェビキ）はこの情勢の出現により戦争のもたらす惨禍からの唯一の活路は先進諸国におけるプロレタリア社会主義革命以外にはないとの確信を強めていた。しかもここで注意すべき点は帝国主義戦争における交戦国の背景には資本の膨大な集積と政治経済力の集中化が生まれておりこの条件の下では客観情勢の一般的な成熟と同時に革命情勢の発展に不均衡が生まれるため世界同時革命を待たずともある一国あるいは数国におけるプロレタリア革命が先行的に可能であり、それがまた世界革命を切り開くとともにそれを加速するであろうと思考していたことである。これはレーニンの洞察であった。ロシア革命の実現はレーニンのこの天才的な洞察に負っているといえる。従ってこの時以来世界史は二つの世界、二つの文明、二つの価値が共存しつつ、この二つが相和し相戦う世界史過程に入った。こうして社会主

義は一国に始まり発展してやがて世界体制となった。両体制の存在は今日も依然として厳粛な現実である。しかし存在する矛盾の捌き方について以前からいろいろ問題があった。

ゴルバチョフ政権の登場によって新しい政治的思考なるものが提唱された。この〈新しい政治的思考〉なる用語は新政権の成立と共にソ連の対外政策に冠せられて用いられていたが、これは具体的な対外政策そのものを指すというよりはむしろ対外政策の基礎となる独自の発想法を指すものと解すべきものである。ここでの〈新しい〉とはブレジネフ政権の対外政策を〈古く〉なったものとみてこれに対置した言い方である。ブレジネフ時代にも平和共存は相変わらず唱えられていたが他方ではいわゆる先制防御論に基づいて核開発と配備に力を入れていた。これはアフガン派兵や主権制限論とワンセットのものであった。新しい政治的思考とはそれらとの絶縁を意味する。従ってこれはソ連の対外政策にとって重大な変化であった。それを促したものは他ならぬ核開発のエスカレーションであった。核武装は既に臨界点に達し、これ以上